

---

# 黒と紅の物語

SGC

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒と紅の物語

### 【Nコード】

N4482BA

### 【作者名】

SGC

### 【あらすじ】

この作品は東方projectの二次創作です。

幻想郷を舞台とした、オリキャラ・黒羽幽鬼の物語です。

原作崩壊・シリアス・オリキャラ・独自の世界観等ありますので、

苦手な方はお戻り下さい。

## 第0話 「黒羽幽鬼」(前書き)

この小説は、オリジナルキャラクターを主人公とした  
東方の二次創作です。

キャラ崩壊・独自の世界観・シリアス・戦闘・微エロなど、  
苦手な方はお戻り下さい。

なお、この小説はとても下手なので、

多少の矛盾、誤字、変な日本語などあります。

そういうのも嫌な方はお戻り下さい。

では、グダグダですが、小説の方をどうぞ。

## 第0話 「黒羽幽鬼」

「此処は何処だ…？」

俺は目に映る天井に問いかける。

勿論返事が帰ってくるはずもなく、シーンとした空気が流れる。

俺はゆっくりと体を起こし、辺りを見回す。

今、俺に理解できることはたった一つ。

明らかに自分の住んでいた家ではないということ。

俺の部屋には、こんなベッドもシャンデリアもないしな。

っていうか、この部屋のことはどうでもいい。

とにかく此処は何処なんだ？とりあえず外に出てみるか…。

俺はベッドから出て、部屋の扉に向かう。

すると、タイミング悪くこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「誰か来る…！」

何となく危険を感じた俺は、急いでベッドに戻り寝たふりをする。

（相手が必ずしも味方とは限らないからな…。）

案の定、ドアの前から声が聞こえてきた。

「この部屋です、お嬢様。」

「有難う咲夜。」

刹那、ドアノブが傾き

ガチャッ

扉が開いた。開いてしまった。

会話から察するに、主と従者のようだったが…。

二人がかりで俺を殺る気か…？2つの足音が迫ってくる。

まるで処刑場の階段を上がっていくような感覚。

とんでもない緊張感。そして

「あら、起きていないじゃない。」

たった一言で背筋が凍った。  
恐ろしい感覚。

「ヤバイ、こいつはヤバイぞ…！」

「フフ、怖がらなくてもいいわよ。」

本人はそう言うが、實際声をかけられてみると、

この凍りつくような感覚は、そんなに甘いものではない。

「とにかく、体を起こしなさいな。」

「こ、殺す気じゃないよな…？」

恐る恐る聞いてみた。

「そんなことしないわよ。とにかく体を起こしなさい。」

従わないと殺されるような思いで、俺はまたゆっくりと体を起こした。

そして、後ろを向くと…。2人の女性の姿があった。

右側に立っているのは、恐らく人間だろう。

メイド服を着ているということは、こちらが従者だろう。

だが、左側に立っているのは…。

紅い眼に、鋭い牙。おまけに黒い翼。

年齢は…10歳前後か。

「何者だ、あんた。」

「他人の名前を聞くときは、まず自分から名乗るものよ。」

む…、随分と上から目線だな。まあ、一応正しいのかな。

「…俺は黒羽幽鬼。黒い羽に、幽霊の幽。『き』は鬼だ。」

「あら、随分と物騒な名前ね。」

お前は見た目が物騒じゃないのか、というツツコミは何とか抑えておいた。

「私はレミリア。レミリア・スカーレットよ。」

で、隣にいるのが、この屋敷のメイド長の十六夜咲夜。」

紹介された咲夜は、俺に軽く頭を下げた。

「で、此処は何処なんだよ？出来れば早く家に帰りたんだけどな。」

「ここは紅魔館。『妖怪の山』の麓に位置するわ。」

「さっぱり分かん。」

言うとレミリアはムツとした表情になり、

「なによ、面倒くさいわね。咲夜、お願い。」

バトンタッチを要求された咲夜は、軽く頷き続けた。

「簡潔に述べるならば、此処は人間界ではありません。」

「え？」

「此処は幻想郷と言われ、妖精、鬼、妖怪など、様々な種族が住む世界です。」

「…それを俺に信じると？」

「ええ。」

「ハハ、まさか。そんな話を誰が信じるかよ。」

ムチャクチャにも程がある。本当に頭がついていかなかった。すると、交代して黙っていたレミリアが口を開いた。

「あんたは私の姿を見て、何とも思わなかった？」

「そりゃ思ったださ。紅い眼に牙に翼…確かに人間には…無い…か。」  
徐々に声のトーンが落ちていった。

本当にここは、化け物だらけなのか…？咲夜の話信じるしかないのか…？

「じゃあ、お前は人間じゃないんだな。」

「そうよ、私は吸血鬼。」

吸血鬼…、ニンニクとか十字架が苦手っていうアレのことか？

学校の本でしか見たことがないから（しかも男のみ）、あまり分からないな。

そんなことを考えているうちに、ふと新たな疑問が浮かびあがる。

「俺は何で、えーと…幻想郷に迷い込んだんだ？」

「さあ？それが分からないから、今色んな奴が調べてるよ。」

「なら、人間界に帰る方法は無いのか？」

俺は焦り始めているのか、少し強めの声を出していた。

そう、原因はともかく、その方法だけあればどうにかなる。

「あるといえばあるわね。」

「あるのか？」

期待の眼差しを2人に向ける。

…妙な沈黙。

一体どうしたと言うのだろう。俺、何か妙な事聞いたか？

「実は、その方法で本当に人間界に帰りついているのか、はっきりしていないんです。」

口を開いたのは、咲夜だった。

「はっきりしてない…？」

「最近明らかになっただんです。人間界に帰り着く前に消滅する可能性があると。」

「なるほど、それは確かに嫌だな。でもどうしてそれが分かったんだ？」

「その方法は、『境界を操ることのできる』方が行なっていますから。」

それはまた物騒だな。そいつも吸血鬼か何かだろうか？  
ん、待てよ。

「つてことは、人間界側に問題があるのか？」

「ええ、まあ。そのお方が人間界を除いたら、真っ暗だったそうですわ。」

うーん、分からないな…。

…つて、何本気で考え込んでいるんだか。

「じゃあ、俺はこれからどうすればいいんだ？」  
とりあえず聞いてみた。

「ええと、その問題が解決するまで、その…。」  
その言葉の続きはもうわかっていた。

「…此処に居ると？」

「…はい。」

「やれやれ、そういう理由なら仕方ないか。」

どうせ心配してくれるやつなんざ人間界あっちには居ないしな。

「でもいいのか？あんならは。」

「お嬢様がよろしいのでしたら…。」

「私は別に構わないわよ。じゃあ幽鬼、よろしく。」

そう言い、レミリアは手を差し出した。

「…ああ、よろしくレミリア。あと、咲夜も。」

レミリアと握手を交わし、次は俺が、咲夜に手を差し出した。

「はい、よろしくお願いします。」

そう言い、咲夜とも握手を交わした。

この二人、案外優しそうだ。

さっきまでビクビクしてたのが馬鹿みたいだな。

「さて」

レミリアが口を開く。

「パチエ達にも確認を取らないといけないわね。」

…また知らん名前が出てきたな。

「咲夜、とりあえず夕飯の時には必ず全員集めて頂戴。」

「分かりました。あ…、妹様は？」

妹がいるのか、レミリア。

ていうか何でそんな困った顔をする？

「あ…。良いわ、連れてきなさい。」

「分かりました。では、失礼します。」

そう言い、咲夜は一瞬で姿を消した。

「さ、咲夜が消えた…？」

今度は何なんだよ一体…。

「言っただけだったわね。咲夜は『時間を操る能力』を持っているのよ。」

「じゃあ、後でまた来るわ。」

「あ、ああ。」

そして、レミリアもこの部屋を後にした。  
境界に、時間か。流石にもう驚くのも飽きてきたな。  
ていうか一人じゃ何もすることがないぞ？  
何をしようか考えた結果。寝ることにした。  
また来るって言ってたし、起こしてくれるだろうな。  
急に安心して眠くなった俺は、眠りについた。

だが、あの申し出を了承したのが

俺の不幸の

始まりだったのかもしれない。

T o B e C o n t i n u e d . . .

第0話 「黒羽幽鬼」(後書き)

何が言いたいのかさっぱり分からない？

はい、それが正しいと思います。

でも一応真剣に書いてますので(汗

なお、意見・アドバイスは要りません。

というか、されても恐らく応えられません。

ですが、誤字は教えていただけるとありがたいです。

閲覧有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4482ba/>

---

黒と紅の物語

2012年1月12日02時02分発行